黒パン俘虜記

胡桃沢耕史

文藝春秋

黒パン俘虜記

胡桃沢耕史

文藝春秋

黒パン俘虜記
昭和五十八年五月三十日　第一刷
昭和五十八年九月二十日　第五刷
定価　一二〇〇円
Printed in Japan

著者　胡桃沢耕史
発行者　西永達夫
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
印刷所　凸版印刷
製本所　矢嶋製本
万一、落丁乱丁の際はお取替えします
©Kōshi Kurumizawa

黒パン俘虜記／目次

一章　独裁者の約束　5
二章　白い行進　52
三章　俘虜たちの休日　87
四章　われ暁に祈るまじ　128
五章　国境の夜　165
六章　家畜列車　206
七章　最後の審問　233
八章　祖国への船路　275

装幀　坂田政則

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

黒パン俘虜記

一章　独裁者の約束

1

ぼくの二十歳の誕生日は、当人が思い出しもしない間に過ぎてしまった。敵と遭遇し毎日激しい銃火を交えていたからである。相手は北支那の共産八路軍の中では精強を以て知られた李雲祥少将の直轄軍であった。

戦闘が終って、何人かの同年の友を骨箱にして胸に抱き、誕生日から半月後の五月中旬、中隊の基地のある村へ戻ってくると、軍曹に昇進の命令が来ていた。『乙種幹部候補生』の肩書きがあるため、只の軍曹よりは若干権威は落ちたが、兵・下士の間では二番目の高官である。同時に分隊長として十二名の部下を預かる身になった。

現地で召集されてからまだ一年と少し、連日の小戦闘で先輩の消耗の激しかった前線部隊だからこその異例の昇進である。

その部隊は独立旅団という集団だったが、軍隊用語では『乙種編制部隊』と呼ばれていた。戦闘部隊なら必ず天皇から賜わるはずの軍旗がなかったし、将校の殆どは乗馬を持たず、小銃の半分は八路軍からの鹵獲銃で、兵は支那鞋を履いて山地を駆け回った。ぼくは小学校以来この乙という字には縁が深い。

北京市周辺の警備を受け持っていた旅団は、八月に入ると、貨物列車に乗って移動した。汽車は深い山脈の間を丸一日走って停った。新しい警備地域は、支那と、満洲と、内蒙古との、三国の国境にまたがっている万里の長城だった。ぼくの中隊は、一番満洲国側に突出した地域を受け持ち、分隊毎に五百メートルに一つある望楼に分駐した。兵隊たちの間に何か大きいことが近く起るらしいという噂が拡まり落着かない。軍曹とはいっても年次としては初年兵も同然の身では、古参の十二名の兵の統率などは不可能であった。

このあたりの長城の塀の上は、トラックが通れるほど広いので、司令部が充分に見通せる方角へ歩哨を一人立たせただけで、後は皆塀の上で勝手に昼寝や花札などさせていた。

現実には敵の攻撃は全く無くなり、平穏な勤務が続いた。入隊以来毎日休みなく戦場を駆け回っていたぼくにとっては、久しぶりの骨休めだった。敵どころか、うるさい巡察将校さえ、もう何日も来ない。

十三日になった。

望楼の一番高い所で司令部を見ていた歩哨が、あわてて下りてきて報告した。

「分隊長殿、変です。汽車が動き出しました」

それまで、ぶったるんでいた兵士が、急に敏捷に城壁にとりつき、並んで首を突き出して、はるか山の下の谷間にある司令部を見下した。操車場に溜っていた何十輛もの列車が、次から次へと支那側に出発して行く。双眼鏡でのぞくと、列車の屋根や、石炭車の上にまで兵隊が我勝ちに乗りこみ、しがみつく有様がはっきり見えた。

「何だありゃー。うちの部隊の奴らだぞ」

「おーい。おれたちを置いていく気か！」

なぜ逃げるように去って行くのか不安だったが、何の連絡も届いていないし、勝手に部署を離れることは許されないので、どうしようもない。夕方までには、司令部のある谷間の町には、一人の兵隊の姿も見えなくなった。夜になって中隊間の連絡兵がやってきて、満洲側に突出したぼくらの二個中隊だけが置いていかれてしまったことが分った。

これが軍隊は運隊だという昔からのいい伝えの通り、運命の明暗をはっきり分けた。

支那側に逃げ戻った旅団の兵隊は、その年の十一月には全員が祖国の土を踏んだ。残された二個中隊は、それから二年半以上の長い旅に連れて行かれ、沢山の兵が酷寒の土地で、飢え死にした。遺体は凍土に簡単に埋葬してきたが、もう犬に喰われて骨のかけらも残っていないだろう。

誰も未来のことは分らない。

翌日の十四日は、一日平穏であった。

十五日の朝起きて、何気なく城壁の下を見た分隊長のぼくは仰天した。それまで人の影が全く見えなかった、内蒙古と満洲国側の二つの正面は、敵兵の波で埋まっていた。何百台ものトラッ

クに牽かれた長身の野砲の砲口はすべて、ぼくらへ向けられて発射の態勢にあったし、何万人もの騎馬の兵士は、引鉄をひけば七十二発の弾丸が即座に飛び出す短機関銃を肩に掛け、城壁の下でひしめいていた。我が分隊十二名に対しての攻撃としては幾ら何でもオーバーだ。勿論命令があるなら戦いを辞する気持はないが、とりあえず左右の望楼の出方も見なくてはと思って双眼鏡を向けると、どこも呆れて小銃も向けずに覗いているだけだった。

血気にはやって勝手に応戦する者が一人も居なくてよかった。遠くへ逃げた司令部からこの朝やっと初めての無電の連絡があって、先任将校の老齢の予備役中尉が、俄か作りの白旗を掲げて、城壁を下りて行き、折返し、降伏・武装解除が決った。これは、天皇陛下の命令だそうだ。

敵兵が回りで見守る中で、小銃を捨て、剣を吊った帯革を解くのは、何とも情ない思いの儀式であった。丸腰になったぼくらは、敵兵の銃剣に追いたてられて、満洲側から回送されてきた家畜運搬車輛に詰めこまれた。その日から六十日間の長い列車旅行が始まった。途中で満洲国側に駐屯していた軍人や、居留民団が乗りこんできて、その度に同じ部隊の人間は分散し、やがては誰がどこにいるのかさえ分らなくなった。

扉口にはロシヤ人とも支那人とも違う、異様な顔の、揃ってガニ股の兵士が、一人ずつ警備についた。彼らは人員の数には極度に神経質だった。病死者や逃亡者が出ると、他の車輛から、かっ払ってきて人数を合せるところなど、日本の軍隊とそっくりの慣習を持っていた。

乗客の方は誰もがこの汽車旅行は、日本へ帰る旅と信じていた。夜になってまっすぐ北極星へ向って走っていることが分っても

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

「一旦ソ連領へ入ってウラジオから帰るのさ」

そういって喜びあった。

この汽車旅行の途中で初めて、乗客たちに黒パンが配られた。軍隊言葉でいえば黒麵包(こくめんぽう)である。固くて酸っぱく、これまでの軍用常食と比べて、何とも異様な味がした。一口かじった瞬間吐き出した者も多かった。しかしやがて、それは大事な食料になり、カステラより美味しく感じるように、皆がなっていく。

誰もが行く先を知らず、帰国を夢みていたとき、実はぼく一人は汽車がどこへ向っているのかを知っていた。

ぼくには軍に召し捕られる前の十八歳から十九歳までの一年間、黒い酸っぱいパンを砂漠の中で常食としていた時期があった。大学の予科に入った年に、軍にとられるのを怖れるあまり、語学実習の名目で、大学から世話してもらって、内蒙古自治区の特務機関の下働きになった。だから蒙古語がほんの少し分った。

戦況が逼迫(ひっぱく)してくると、軍は現地で働いている壮年の男子を容赦なく召集していった。その上徴兵年齢引下げ令が発効されて、用心深く振舞って安全圏にいたつもりのぼくは内地にいた友人よりも早く網にひっかかり、近くの部隊へ入隊を命じられてしまった。徴兵逃れ工作は失敗したがそのため十五日の日に城壁の下で武装解除を受けたときに、この異様なガニ股の男たちの軍団が、ゴビの砂漠の向うに住むジンギス汗の直系に近い蒙古共和国の人々の集まりだと、言葉遣いからすぐ分った。列車に乗せられてもしばらくは、彼らの言葉など知らぬふりを通していたが、

どこへ連れて行かれるのかが気になって、堪りかねて一度質問したことから、通訳代りに彼らの用をするようになり、その代り他の兵士の知らないようなことも教えてもらった。

蒙古共和国軍は八月九日からの満洲国侵攻に二万人を動員して従軍した。その褒賞として、同数二万人の人間を労役奴隷として本国へ連れて帰ることを、彼らの宗主国から許可されたのだ。

列車は満洲国の中央部を北上し、黒河の凍る前に外輪船に貨車ごと乗って渡河し、シベリヤ鉄道の線路に改めて乗ると、バイカル湖の手前まで行って左折して国境へ着いた。そこで二カ月の列車の旅を終った。全員がトラックに分乗し、丸四日間、家一つ見えない砂漠を走り続けて、やっと蒙古共和国の首都に着いた。それでもまだ兵士たちの大半は、この町は日本へ向う船を待つための臨時の宿泊地だと思っていた。

そこは山と川に挾まれた、意外に景色のいい平地であった。食事は黒パンが主になったので、一緒に入った人々は、まだ名も知らぬこの国を、黒麵包帝国と呼んだ。船便を待つための滞在と信じているから、皆従順であった。

その帝国……本当は大統領が統治する共和国であったが……は町の中央の川には清冽な水が流れ、魚さえいたし、背中にあたる山には松の緑が濃かった。ただしこれは映画のセットのようなもので、町を一歩出れば、十日歩いても人家一つ見つからない岩だらけの荒地が続いていた。

2

砂漠をトラックで運ばれて、この首都に到着したときは、川の両側の平地には、白いきのこの

ようなフェルトの天幕と、朱塗りの柱のラマ教の寺院と、三階建の政府の建物が三棟あるきりだった。

ぼくらは平野の周辺の十カ所の地点に、二千人ずつに分散させられた。野宿しながら、酷寒地での自分たちの寝る場所を作って行かなければならなかった。もう十月に入っていたから、野宿はきびしく逆に作業には熱が入った。

半ば凍りかけた土を、深さが五メートル、縦五十メートル、横三十メートルぐらいに掘る。上に板を渡し、土を薄くのせ少し水をかけると、忽ち凍って固い屋根になった。穴の側面は風を通さない自然の壁であった。中に三段の棚を作り、二千人の兵士の住居ができた。

一緒に来た集団の殆どが、満洲国に駐屯していた軍隊の兵士だったので、部隊の先任将校の少佐が、将校団の中心になって指揮をとっていた。ところが輸送の途中で、この一団の中に、軍刑務所の囚人が合流したことが集団の秩序を変える原因になった。

この囚人たちは、俘虜になると、自分たちがもう苛酷な日本陸軍の支配から離れたことを知った。とたんに行動を起した。まず輸送中の列車の中で、これまで自分たちを苦しめてきた看守たちを夜になると次々と殺して、途中のシベリヤの荒野に投げ捨ててきた。そのため誰も彼らの素性に気がつかず、ただ何となく不気味な連中が三十人ばかり固まって居ると思っても、特別の注意を払わなかった。

それに川原の畔りに宿舎ができ上るまでは、元囚人たちは、意識して目だたぬように働いていた。

宿舎が出来上って入居の日が来た。奥の特別室に少佐が入り、周辺に将校団の住居地域が定まり、そこだけは二段で回りは毛布で囲われていた。

他の者は、三段の棚に頭をこごめてもぐりこんだ。今はこの集団の一員になっているぼくもその一画に自分の分を指定してもらったので、おとなしく荷物を押しこみもぐりこんだ。

妙なことが起った。五分もたたないうちに、その将校たちが、それぞれ屈強な兵士たちに、襟を把まれ、肩を後ろから抱かれ、むりに中央の廊下へひきずり出されて、整列させられていた。少しの抵抗にもビンタがとんだ。

将校たちの脅しの叱責も、どなり声も、まるでその造反の兵士たちにはこたえない。

ぼくはびっくりして棚から顔を出して眺めていた。旧来の軍隊の常識では、考えられない異常なことが起っている。

三人の親分格の男は、黙って棒を動かして指示している。

三十人の元囚人たちは改めて一斉に将校たちを殴りにかかった。手には皆旧軍の私的制裁のときの常用器具であった革のバンドや、スリッパが持たれていたが、ふいをつかれた将校たちは素手であったし、それにもともと腕力ではかなう相手ではなかった。

抵抗もすぐ終って、皆が殴られ放しの状態になったとき、初めて凄味のきいた啖呵がとんだ。

「こう！　てめえらいつまで軍隊風を吹かしやがって、それが砂漠の真中でも通用すると思ったら大間違いだぞい」

この突然の混乱はぼくだけでなく、大勢いる兵士や下士官にも、あまりに意外すぎて理解でき

ない。両側の棚で寝転びながら呆然と見ているだけで、誰一人として飛びこんで将校を助けようとする者は出なかった。

哀れだったのはもう老齢の少佐で、途中まで突っ張っていた権威が崩れたとたん、泣き声を上げて許しを乞いだした。将校の殆どは血だらけになると、自分の血にびっくりして悲鳴をあげて逃げ回った。それを目の前で見て、これまで軍隊の内務生活で、上級者の苛酷な制裁に苦痛を示すことさえ禁じられて耐えてきた兵士たちが、軽蔑をあらわにし、中には笑い出す者さえ出てきた。

代表者の目付きの鋭い男は、将校全員が血まみれで土の床に倒れた後、その頭を一人ずつ思いきり蹴飛ばして回ってからいった。

「こう！　わいはな、播磨（はりま）の国では村田一家の盃をいただいた、赤穂の小政といわれた極道や。こう！　今日からわいがこの宿舎の隊長や。文句あったらいつでも相手になってやるぞい」

革命は二時間しかかからなかった。

あっけにとられて見ているぼくの前で、新しい秩序が次々と成立して行く。二十人の囚人が、全員を百人ずつ分けた作業隊の長にそれぞれ任命された。傷だらけの元将校を含めた全部の兵士たちが、その下での服従を誓わせられた。勿論ぼくもその一隊に編入させられて只の労働要員の一人になった。

小政と二人の仲間が、少佐が入るために作られた部屋に入り、三十人の仲間は将校用の区画に居を定めた。寝場所がきまると、わざと班長に就任しなかった十人の元囚人と、三人の大幹部は

直ちに、炊事の接収に出かけた。

多少の反抗はあったらしいが、悲鳴が少しの間、聞こえてきただけで戦いは終った。その夜のうちに炊事係は全員交替になり、十人の元囚人が炊事の全権を握って運営することになった。

これまで炊事は、帝国側から、二千名の昼食用に、四人で一本を定量として、二キロの黒パンを一日五百本ずつ、毎日受領していた。これを小政の一言で、翌日から五人で一本の定量に変更された。

これで一日百本のパンが浮いたが、それが三人の大幹部の独裁権力の確立と、三十三人の元囚人の新幹部団の体力確保や、権威の確立のための財源にされた。同時に、この帝国の管理者の将校や、警備の兵は俘虜同様に貧しかったので、小政は百本の半分は無条件に彼らに回してその信頼を得た。ぼくはこの小政のやり方を見て自分の空腹を忘れてひどく感心した。

少くとも小政は国や組織が成立するときの基本の条件を知っている。それとも、昔属していた任侠の団体のしきたりに学んだのだろうか。日々余ってくるパンの在庫の確認や出し入れは、小政と他の二人の大幹部が必ず交替でチェックする、大事な専任事項となった。見事なほどの管理運営ぶりだった。

新しい秩序で収容所が動き出してすぐ、新幹部側が、将校服を大量のパンと交換するという情報をふれ回った。早くて二日、おそい者でも十日目には、金筋入り階級章や、参謀用モールのついた華麗な将校服を手放した。

新幹部の服装が急に立派になった。代りにこれまでの将校たちは、数日間の空腹を免れた代償

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c